

英国病理学会参加報告

下田将之

慶應義塾大学医学部病理学教室

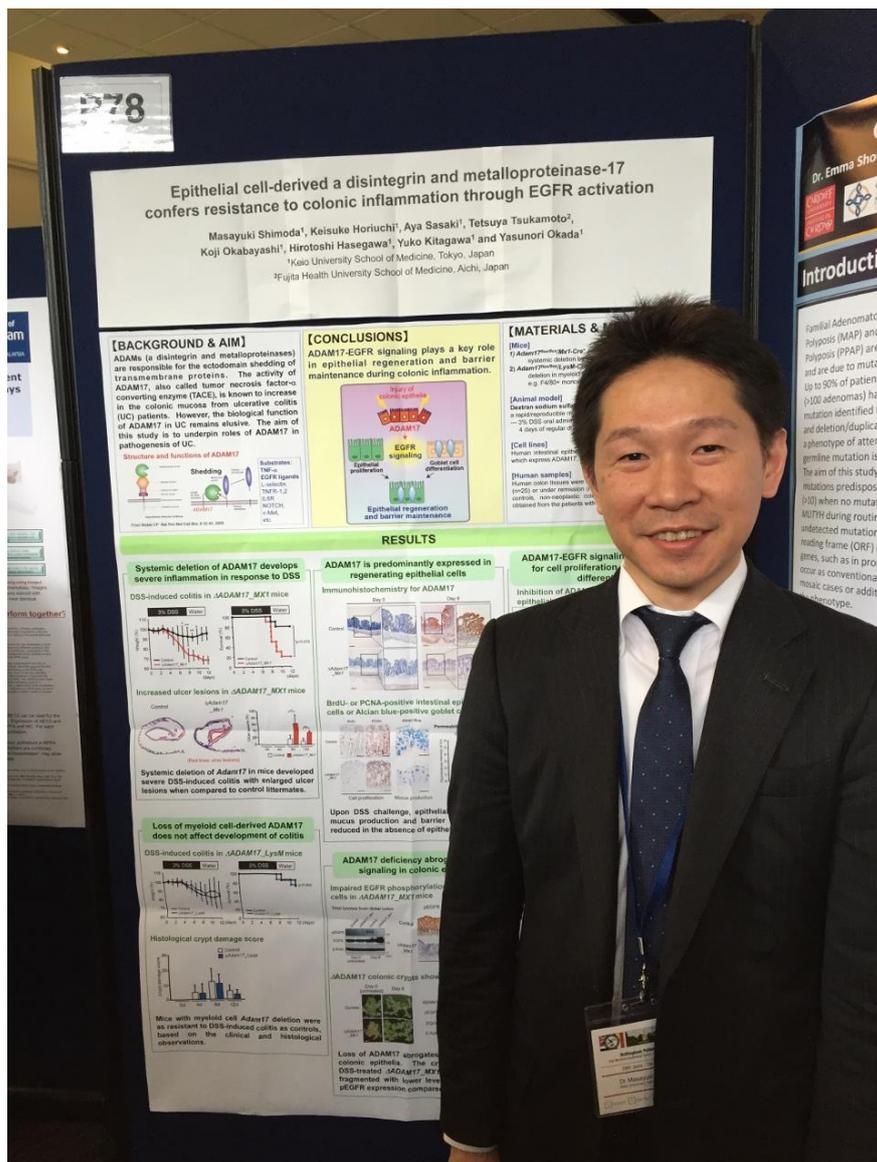
このたび日英病理学会国際交流事業の一環として、2016年6月28日から7月1日までノッティンガムで開催されました英国病理学会（Nottingham Pathology 2016）に参加させていただきました。ノッティンガムはロンドンから電車で約2時間のところに位置し、ロビンフッドで有名な町です。出発直前にはEU離脱のニュースがあり英国内の情勢を少し心配しておりましたが、特に大きな問題もなく、学会に参加させて頂くことが出来ました。

学会はノッティンガム大学 Ellis 先生の開会の辞で始まり、様々なシンポジウムや特別講演が企画され、多くの著明な先生方の講演を拝聴することができました。特に、”GI-Sessile Serrated Lesions”のセッションで発表されたカーディフ大学 Williams 先生のご講演では、大腸鋸歯状病変の遺伝子背景や形態的な特徴を明快にご説明され、大変印象的で非常に勉強になりました。英国病理学会は、日本病理学会総会と比べると小規模ですが、Trainee（後期研修医）から Professor に至るまでアットフォームな雰囲気、英国病理学会会長の Quirke 先生をはじめとする先生方ともお話をさせて頂き、大変有意義な時間を過ごすことが出来ました。また、ポスター発表の際には、若手や中堅の研究者とも意見交換をすることができたほか、Trainee によって企画・運営されたレクチャーやスライドセミナーがあり、彼らの病理診断や研究に対する積極的な姿勢に大変刺激を受けました。学会の最後には Conference Dinner があり、バンドの生演奏があったり、移動式の遊園設備が用意され皆でゴーカートに乗ったりなど、とてもエンターテイメントに富んだ懇親会で、学術的な内容のみならず、大変楽しむことが出来ました。

学会中には、大阪大学 和田先生とともに、ノッティンガム市内にある Queen’s Medical Centre (QMC)の施設見学をする機会も頂きました。QMC は英国内でも特に大きな教育的医療機関とのことですが、年間病理検体数は50,000件を超え、25名もの病理医が診断にあっているとうかがい、その規模の大きさに驚きました。病理業務の様子を見学させて頂き、検体処理から標本作製に至るまでの過程については日本と大きな違いを感じませんでした。免疫染色のオーダーの際には種々の疾患に対する免疫染色パネルが詳細に用意されており、大変効率よく診断が行われている印象を受けました。また、病院内には設備の充実した研究室が併設されており、病理診断と研究が密に連携して行われている様子もとても印象的でした。

本学会では、2015年日本病理学会総会（名古屋）に参加された英国病理学会 Trainee の Petts 先生や Haynes 先生をはじめとする若手の先生方に多大なご配慮を頂きました。滞在中にわたり様々な企画をして頂いたり、病理に限らず色々な話をうかがったり、美味しいインド料理レストランを探して下さったりと大変お世話になりました。ご厚意に改めて感

謝いたします。最後になりましたが、このような大変貴重な機会を与えてくださいました日英両国病理学会の皆様、また、学会中大変お世話になりました順天堂大学 八尾隆史先生に深謝申し上げます。今後もこのような学会で発表できるよう、さらに研究成果を上げられるよう努力していく所存でございます。今後とも御指導・御鞭撻の程、何卒よろしくお願ひ申し上げます。



下田学術評議員ポスター発表